

2009年11月30日

函館市長 西尾 正範 様
函館市議会議員 吉田 崇仁 様
函館市教育長 多賀谷 智 様

函館市立弥生小学校校舎 保存・活用要望書

DOCOMOMO Japan

代表 鈴木博之

(青山学院大学教授・東京大学名誉教授)

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を訴えることを目的のひとつとする、世界54カ国が加盟している近代建築保存の非政府国際組織 DOCOMOMO (= Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement : モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織) の日本支部です。

さて、函館市弥生町に存在する「旧弥生小学校」につきましては現在小学校の統廃合に伴って建て替えの検討がなされている旨、聞き及んでおります。

この建築はご承知のとおり、昭和9年(1934年)の函館市の大火後に建設された不燃質による復興小学校の一つとして建てられました。函館市の技師であった設計者の小南武一は、大火後の復興を担う復興事務局工事課建築係長として中心的な役割を果たしましたが、この弥生地区の傾斜地を巧みに利用して市民の防災拠点としての役割をも考慮し、モダニズムの理念に沿ったさっぱりとした意匠で、周辺の自然環境に配慮し、子供たちが生き生きとした小学生生活(教育)を過ごせるための空間構成がなされています。

この校舎は建てられてから71年を経ましたが、函館の都市景観形成地区を構成する上で欠かせない建築として函館市民だけでなく、このまちを訪れる多くの観光客に慈しみをもって見守られてきました。それは本来この建築の持っている建築としての魅力とともに、75年という長い歳月が生み出したものです。またこの小学校に関わった人々の軌跡、例えば木造校舎時代に石川啄木が教鞭を取ったことや、亀井勝一郎の出身校であることなどが大勢の人に関心を持って見られ、この小学校を巣立った人の誇りとしてその人々の人生を支えていることにあるのだと考えます。

これは例えばこの建築を模したレプリカや内部空間のない外壁だけの保存であっては決して得られないものです。この建築を失うことは函館市の損失というだけでなく、人の生活に影響を与えてきた日本の建築文化の一端を損なうものであるともいえるのです。

耐震の問題も取りざたされていると伺っていますが、昨今の日本の耐震技術の進歩は目覚しく、又様々な保存事例も報告されております。この建築の大切なところを継承していく、つまり保存する視点での耐震診断と改修計画を再検討なさいますようお願いいたします。又改修に当たっては、この建築の魅力と価値(オーセンティシティ:原初性、つまり由緒ある正しさ)を精査し、それを上手に残すことが大切です。そのために検証する専門家を交えた有識者による委員会設置などをして検討するののも一つの方法だと存じます。

時代は変わるものですが、時を経た建築の価値をつかみとり、現在(いま)の時代に対応できる機能を加えながら改修することは、新しい時代の創造行為です。これを成し遂げれば、この行為は広く社会に伝わり、後世に大きな足跡を残すことになると思います。是非上記ご検討の上、この建築を存続させてくださいますようお願いするものです。

なお、DOCOMOMO Japanはこの建物の保存活用に関して、建築の専門家という立場から、できる限りの協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

<付記:北海道大学 角 幸博教授による見解書は、2008年8月7日付けで「日本建築学会北海道支部歴史意匠専門委員会有志」によって西尾正範市長、阿部善一市議会議員宛の要望書に添付したものです。角教授が DOCOMOMO Japan の主要メンバーですので添付いたします。>

函館市立弥生小学校校舎に関する見解

北海道大学大学院教授 角 幸博

函館市弥生町 14 に位置する弥生小学校は、昭和 9 年大火後に建設された 6 つの不燃質復興小学校の最後を飾る作品である。同校は大火の被害を直接受けなかったが、明治 41 年竣工の木造校舎の老朽化が著しかったため、復興事業の一環として新築されたものと考えられる。

昭和 12 年 12 月 2 日着工、同 13 年 12 月 25 日竣工、翌 14 年 11 月 17 日新築落成式を迎えた、鉄筋コンクリート造 3 階建て校舎で、設計は、小南武一(1897-1976)が主導した復興事務局工事課建築係、施工は森川組であった。

変型コの字型平面の校舎は、隅角部を曲面とし、地階東坂側に第一昇降口、弥生坂側に職員用玄関、さらに 3 層目 2 階の両坂側に第二、第三昇降口を設けるなど、西を弥生坂、東を東坂に挟まれた敷地の斜面をいかした平面計画は、他の復興校舎には見られない変化を有している。三方を校舎、山側一方を屋内体育館として、中央に運動場を取り込んでいるのは、住民の避難場所として意図されたものでもあった。他の復興小学校と同様に、片廊下型とし、普通教室(9×7.27 m)や廊下幅(2.73m)は、当時の東京市の鉄筋コンクリート造小学校のそれ(普通教室 8.55×6.9m、廊下幅 2.7m)よりも、幾分大きめに設計されているのも特徴である。

隅部の曲面や階段質の丸窓以外、装飾らしいものを排除した、さっぱりとした外観は、他の復興小学校同様、速やかな建設に対応したものであったと推察できる。現在は、屋上部に覆い屋根をかけ、創建時のシャープな水平性の印象は失われているものの、階段室の丸窓や、内部廊下の丸みを帯びて処理されたハンチなどは創建時の雰囲気そのまま持続している。

本建築は、以下の点で評価することができる。

- 1) 鉄筋コンクリート構造や不燃校舎を、全国的に見ても早くから導入しようと試みた函館市の先進性を示す記念碑の一つである。
- 2) 昭和 9 年大火復興の鉄筋コンクリート造不燃校舎の一つであり、大火を教訓とする防災都市建設の証人である。
- 3) 設計は、小南武一係長を中心とする復興事務局工事課建築係であり、函館市が卓越した技術者集団を擁していたことを示す貴重な資産の一つである。
- 4) 函館山麓に広がる特徴的な斜面地景観を特徴づける主要な要素の一つである。
- 5) 復興小学校は、校舎誕生時から社会教育施設、地域集会場としての利便性のほか、都市美観についても考慮された都市施設として位置づけられていた。

1) および 2) について

函館市における鉄筋コンクリート造の本格的建築は、明治 45 年 7 月着工の大谷派本願寺函館別院本堂(大正 4 年完成)である。施工は 10 世伊藤平左衛門であったが、実際には配下の木田保造(1885-1940)に一任された。木田は、市内の鉄筋コンクリート造建築の大正堂書店(大正 3 年)、金森倉庫(大正 5 年)、北海道拓殖銀行函館支店(大正 11 年)、函館天主公会(同)、日露漁業函館支社(昭和 3 年)のほか、北海道では一時期独占に近い形で鉄筋コンクリート造建築を施工したことで知られる。また木田は、大正 2 年 6 月『火防建築について』という記事を函館毎日新聞に掲載し、その中で「学校建築を第一に不燃にすべし」と述べている。

さらに大正 5 年には、工業補修学校で、本道初の鉄筋コンクリート工法の特設科が開かれ、東京高等工業学校付設教員養成建築科出身村田専三郎が講義を開始している。この講義には、各方面の技術者が参加し、修了後受講者 45 名全員が引き続き不燃建築研究発展のため「建築同好会」

を組織している。

こうした火防建築や不燃建築を求める動きは、大正 10 年大火以降さらに大きくなっていった。大正 12 年に岡田健蔵（函館市会議員、函館図書館長）の『小学校建築の不燃化に就て』というパンフレットが発行され、さらに同年には函館技師小野基樹土木課長の東京、大阪、神戸先進地視察結果「鉄筋混凝土小学校建築調査報告」が『函館市公報』に掲載されている。

不燃化実現のための技術者を擁していなかった函館市は、東京の曾禰中條建築事務所から 3 名の技術者を招聘し、技師三戸義夫、技手小南武一、荒木善三郎らが赴任した。彼らの赴任と同時に、函館図書館本館(1928)、新川小学校(1927)、函館女子高等小学校(1929)などが、鉄筋コンクリートで次々と建設されていった。

このような不燃化建築建設の展開中におこったのが、昭和 9 年 3 月大火である。市では、昭和 9 年 12 月 28 日復興事務局を創設し、不燃質小学校 5 校（青柳、高盛、東川、的場、大森小学校）と弥生小学校の新築がなされ、また非常時避難地として計画された。復興小学校が防災都市の記念碑的意味も有していたのである。

3) について

小南武一（1897-1976）は、兵庫県別府町生まれ。明治 45 年小学校卒業後、加古川製紙株式会社建築部入社、大正 9 年退社して東京の工手学校建築科に入学、同 12 年卒業後、曾根中條建築事務所に入所、大正 14 年同事務所の三戸義夫、荒木善三郎らとともに、函館市に赴任した。三戸技師が北海道庁に転出した後、昭和 4 年技師、同 10 年復興事務局工事課建築係長を兼務し、大火復興の中心的役割をはたした建築技術者である。復興小学校のほか、大火記念慰霊堂（昭和 14 年）は代表作の一つである。昭和 17 年建築課長、同 28 年助役に選任、30 年助役を退任し、小南一級建築士事務所を開設した。

4) について

西を弥生坂、東を東坂に挟まれた敷地の斜面をいかした平面計画は、他の復興校舎には見られない変化を有している。地階東坂側に第一昇降口、弥生坂側に職員用玄関、さらに 3 層目 2 階の両坂側に第二、第三昇降口を設け、斜面地を有効に活かした動線計画がなされているのも本建築の特色である。

5) について

復興小学校は、主要幹線道路沿いや交差点に意図的に配置された。児童通学上の利便性や非常時避難場所としての便益性、通学区域の中央地を占めることの便益性（保護者の集会、職員の家庭訪問、児童校外生活指導など）公衆集会場としての利便性、都市に復興小学校の大建築が位置することによる美観性などを意識したものであり、校舎の有効活用、コミュニティの中心施設としての利便性なども考慮されていた。現代において今後の校舎活用施策を検討することは、復興小学校校舎誕生時の精神にも通じ、同校の歴史を正当に継承するものであるといえる。

以上述べたように、弥生小学校校舎は、日本および函館の不燃校舎誕生の歴史を物語る貴重な建築の一例であり、建築技術史上のみならず、函館市の歴史をたどる上でも大切な資産である。さらに昭和 9 年大火以降、大火被害のないことは、復興小学校を中心とする函館市の都市防災計画の優位性を如実に物語っている。校舎滅失後の防災上の問題、環境変化の問題などの十分なシミュレーションや検討・解析なしに校舎解体を進めることは、都市環境全体のバランスを壊しかねない危険を伴っている。また校舎配置に当たっても、教育環境や避難上の利便性のみならず複合施設利用や都市景観の面でも深く考慮されたものであり、今後の教育施設の活用、転用を検討・展望する上でも、貴重な資産といえることができる。